「失敗」受け止めよ

コロナ禍で東京が最大の危機に直面しているというのに、東京五輪開催が強行された。五輪招致から開催に至る数々の問題点を記憶にとどめたい。毎日 22 日「被災地落胆の復興五輪」から。

新型コロナの感染拡大に伴う緊急事態宣言下で東京大会が開かれることになり、改めて「何のために五輪を開くのか」が問われている。東京都と JOC は大会招致に名乗りを上げた 2011 年に「復興五輪」を掲げたものの、招致戦略の都合からすぐにトーンダウン。大会の意義は情勢を反映した「ご都合主義」で変わり、迷走を続けている。

新型コロナが拡大すると復興五輪の色合いはさらに薄れた。安倍晋三首相（当時）は 20 年 3 月、大会の 1 年延期に合意後「人類が新型コロナウイルス感染症に打ち勝った証しとして開催する」と強調。菅義偉首相も 6 月の党首討論で「コロナを世界が団結して乗り越えることができたことを発信したい」と答弁している。

社会学者の吉見俊哉・東京大大学院教授が復興五輪について、「失敗」受け止めよと発言しているので紹介したい。

震災復興のための東京五輪という考え方には、まやかしがあった。

東北は震災前から東京一極集中で過疎になり経済も従属していた。福島県には東京の電力を賄うために原発が造られ、放射能汚染までもたらされた。五輪開催で東京のインフラを更に立派にすれば、東北はますます厳しい状況に追い込まれる。「復興五輪」であるなら東北をメイン会場にすべきで、東京は最もやってはいけない場所だった。

ただ、海外諸国では、震災の惨状を見れば「五輪で日本を救おう」という声は出てくる。だから国際ウケする「復興五輪」のスローガンが使われたか、これは東北をだしにしたやり方だ。

復興という言葉は「一度衰えたものが再び盛んになる」との意味で、もともと「文芸復興」を指した。東北であれば、 福島の相馬野馬追のような伝統行事や地域の人々のつながり、三陸沿岸の原風景をよみがえらせることになる。だが、1923 年の関東大震災の「帝都復興」以降、より立派な街をつくる開発主義的な意味合いを持つようになった。その典型が首都高や新幹線が開通し、地下鉄が張り巡らされた 64 年東京五輪だ。今夏の五輪も成長期の幻想にすがりついたものだ。

日本社会は 21 世紀に入り縮小局面に入った。人口も減る中で、質を上げながら小さくなる方法を考えるべきなのに、五輪のように華やかで大きいことをやれば何とかなるという考え方は時代に合わない。東京五輪がなぜ失敗したのかを徹底解明することは未来への可能性につながる。

「五輪で少しはいいこともあったよね」とはせず、失敗を正面から受け止めて考え方を変える契機にすべきだ。

（2021 年 7 月 24 日）